

秀吉と淀君  
二卷

人 物

豊 臣 秀 吉

淀 君

近 習 名古屋山三

場 所 桃山御殿の一室

時 間 第十六世紀の末つかた

(朝鮮王驛上の螺鈿の大食卓を中央に、青磁の大鉢へ茹卵を盛り、銀の皿の上にて之を食り食ふ秀吉、之に對して黄金の箸もて卵の殻を剥く淀君、秀吉の額には青き筋二條三條現はれ、淀君の面には不安の色漂ふ。)

秀 吉 此卵は生ぢや、茹かたが足らぬ。

淀 君 殿下は昨日茹過ぎたとて御不興でござりました。

秀 吉 昨日は堅すぎた。今日は生過ぎる。おれは堅すぎるのも嫌ひなら、生過ぎるも好かぬ。恰度よい

秀吉と淀君

のがよいわ。

淀君

殿下の御思召にかなふ様には、なか／＼難かしうござりまする。此卯は南蠻渡來の時辰儀の長い針が、三桁半動く間湯の中へ置いたのでござりまする。しかも妾が自身でいたしたのでござりまする。御忌とあれば致しかたがござりませぬ、妾がいたゞきまする。妾は斯様なが大好でござりまする。殿下には別に煮てさし上げませう。

秀吉

いや、もう遅いわ。兎に角おまへは卯の煮やうを知らぬだけは定ぢや。これからは臺所で煮させえ。

淀君

臺所で致したのでは殿下の御氣にはいよく合ひませぬ。温かなをさし上げやうと思へば、殿下は遅いと叱らせられまする。殿下の御叱りを受けぬ様にと、前かどから持つて参れば、今度は冷えてると御叱りがござりまする。

秀吉

おれはその様な事を云ふた覚えは無い、兎に角料理人にさせえ、彼は卵の煮かたを能う心得て居る。

淀君

明日からは左様致させませう。

秀吉

世は太平と云ふても、いつまた兵馬を動かす事にならうも知れぬ、おまへほどの女が卯の煮やうぐらる知らないでは、心元ない事ぢや。(やゝ感傷的に) あ、寧々(北の政所)は卯の煮やうが上手だつ

た。

淀君 (忽ち嫉妬に美しき目を輝かせ) 寧々? 本丸さまの事を仰せられまするか。

秀吉 左様ぢや、臺は上手卯を煮てくれたわ。

淀君 臺さまは御上手な筈でござります。母御が水仕の婢でござりまするもの。

秀吉 そりや根も無い事ぢや。母は津島在の富豪の娘ぢや。

淀君 富豪でも下賤なものはいくらもござりまする。

秀吉 藤井又右衛門の妻の實家ぢや、下賤な筈は無い。

淀君 藤井家とてもとは津島の土百姓でござりまするがな。

秀吉 そりや嘘ぢや、藤井は郷士ぢや。

淀君 何にせよ、臺様とわたしとを一緒に思ふて下されては情なうござりまする。淀は今こそ斯様になり果てましたが、これでも故内大臣信長公の姪でござりまする。卯の煮やうは存じませえでも、國

家を治むる御輔佐は見事致しまする。

秀吉 もう分つたく、おれはたゞ寧々が卯を煮る事が上手ぢやつたと申したゞけぢや。

淀君 いえ、あなたは尙<sup>も</sup>他の事を云はうとして居られたのでござります。臺さまには妾に出来ぬこと

も出来ると云はうとして居られるのでござりまする。

秀吉 これは又迷惑！ 如斯と思ふたら何事でも爲遂け得ぬ秀吉では無い。況いて口でいふ事に何の遠慮。おれはたゞ水つほい卵は嫌ひぢや、そして今朝の卵は生ぢやつたといふたまでぢや。

淀君 (つと身を起して室を出でんとしながら) もう何もかも分りました。あなたはたゞ妾に御暇を賜はれば、それでよろしいのでござりまする。而して臺さまなりどなたなり、卵の煮やうを御存じの方と御睦

しうなさればよろしいのでござりまする。

秀吉 まあ靜かにせえ！ おれはおまへに腹をたゞさうとていふたのでは無い。おまへが卵の煮やうが

上手なことも能う知つて居るわ。

淀君 (座にかへり) 殿下はその口前で天下を御取りなされました。併し淀はそのお口には乗りませぬ。

もう／＼どの様な事がござりまして、淀は生涯卵は煮は致しませぬ。

秀吉 それもよからう。時に淀、おれは昨日謡をまた一つ拵へた。喜多七太夫めにやらさうと思ふが……

淀君 七太夫は利口ものでござります。殿下のお作でも平氣で舞ひまする。

秀吉 金剛とて舞ふて居るわ。

淀君 『芳野詣』や、『柴田』、『北條』は金剛が舞ふたものではござりませぬ。金剛の弟子の七太夫が舞ふたのでござりまする。

秀吉 七太夫もその頃金剛を名乗つて居つた。

淀君　それを殿下は寵かせられて一家を興させられ、春日の四座が五座になりました。七太夫は利口者でござりまする。

秀吉　左様皮肉に申すな、兎に角おれは昨日『明智征伐』といふを作つた。

淀君　また例の御自慢でござりまするか。

秀吉　自慢では無い、有りの儘を語るのぢや。(懐ろより紙を出し讀まんとす。)

淀君　それにしても『明智征伐』といふ名が諍らしうきこえませぬ。

秀吉　ど、どこが悪い？

淀君　わたくしならば『明智討』と致しまする。征伐といふ字があまり堅くるしうござりまする。

秀吉　しかし明智は逆徒ぢや、たゞ『討』とだけでは物足らぬわ。

淀君　逆徒にもせよ、ものが小さうござります。あれしきの侍一人二人討取るに征伐とは餘り物々しい様に思はれまする。

秀吉　(藤をうち) したり！ 淀。さすがは總見院さま(織田信長のこと)の姪だけある。よし『明智討』と改めう。

淀君　(忽ち秀吉の收攬策にのせられ、うれしげに) してその文句と申しますのわ。

秀吉　最初がワキの出ぢや、「時は今天が下知る五月かなく……」

秀吉と淀君

淀君 「そもくこれは明智日向守惟任光秀なり……」でござりまするか。

秀吉 左様腰を折つては困る。まあこゝはあとで聞かさう。シテの出を聞いてくれえ。「五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて、今日は名越のはらひする、時しも水無月十三日……」。

淀君 (嘲みたる調子にて笑ふ) は、は、は。

秀吉 な、なにか可笑しい。

淀君 名越の祓は水無月晦日でござります。十三日ではござりませぬ。

秀吉 それなら祓の日を變へてもかまはぬ。

淀君 左様はまるりませぬ。「水無月の名越の祓する人は千年の命のぶとこそすれ」といふ古い歌もござりまするほど、糺では大事な祭事でござります。いくら殿下の御威光でも、左様はまるりませぬ。

秀吉 それは困つたな。そこを直すと次の文句も皆くづれる。軍も諺も先手が崩れたらあとは骨灰ぢや。

淀君 そんならば如斯なざりませ。「五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて、名越の祓するといふ、時しも水無月十三日……」。

秀吉 いしくも申した。卯の技倆とはいかひ違ひぢや。

淀君 しかし臺さまには敵ひませぬ。

秀吉 もうその事は申すな。それから如斯ぢや。「流す茅の輪の廻輪の罪、敵にぞ思ひ知らせんと、加茂

の御神を遙かにも額つく髪や神風の………」

淀君 御待遊ばしませ。「額つく髪」の髪は、つむりの髪事でござりまするか。

秀吉 左様ぢや、額づくといふて髪を呼出し、髪といふて神に繋いだ字の働きは一段であらう。

淀君 そのシテは殿下御自身の事でござりまするか。

秀吉 いふ迄も無い。

淀君 それならば「額つく髪」は可笑しうござりませう。

秀吉 何故か？

淀君 でも、その頃殿下の御頭おつしほには髪が無かつた筈でござりまする。

秀吉 (わざと空とぼけ) はて不思議な事を聞くものゝ。

淀君 明智方の四方田に追つめられ廣徳禪寺で御頭を丸められたは、水無月の十日ではござりませぬか。

秀吉 あはゝゝは (哄然大笑す)。

淀君 (わざと相手にならず) 水無月十三日までは三日しか経ちませぬ。伴天連の魔法でも左様早う髪は延びますまい。

秀吉 はゝゝは、まだその様な事を申すか。あの時髪を落したはおれでは無い。替玉の浅野七郎左衛門



ぢやと、幾度も申しきかせたでは無いか。

淀君 いく度承はりましたも、まことらうは思はれませぬ。

秀吉 強情な奴め。

淀君 これが織田家の血を分けた罪でござります。強情は織田家の紋處でござりまする。

秀吉 左様の、しかし織田家の強情は遂げぬ強情ぢや。鼻先の強情ぢや。

淀君 えつ（と、尻逆立つ）。

秀吉 三七どの（信孝）が左様であつた。秋田へ行かれた常真どの（信雄）も左様であつた。いや信長公が第一左様ぢや、その爲めに惟任めに殺られたのだ。

淀君 あ、あなたは叔父上——あなたを草履取から今日の御身の上まで引上げられた叔父上をさへ、その様に仰有りまするか。

秀吉 （一時額の筋の太さを増したりしが、やがて顔の筋肉を緩め）「額づく髪の神風や、……………」

淀君 もう承はりますまい……………」

秀吉 まあ、左様云はずと聞け。「吹靡けたる民つ草、苗代水も豊かなる山崎にこそ着きにけり、山崎にこそ着きにけり。」

淀君 「着きにけり」では違ふて居りまする。

秀吉 能う異論を申す女ぢやの、なにが違ふて居る。

淀君 「山崎にこそ」と申せば、「着きにけれ」と申さねばなりません。「着きにけり」とは申されませぬ。

秀吉 恠體な事を聞くわ、何故云はれぬ。

淀君 「こそ」といへば「けれ」と受け、「ぞ」と申せば「る」と結ぶ。これが倭言葉の掟でござりまする。

秀吉 ふむ、してその掟は誰が定めた。

淀君 誰が定めたかは存じませぬが、天然自然神代のむかしより定まつて居りまする。

秀吉 しかし、謠には「こそ」と云つて「れ」と承けぬ事も度々あるわ、既に『三井寺』の謠に「日こそ多きに今宵しも」とある。

淀君 それは無學のものが作つたのでござりまする。畢竟謠などは無學下賤の作るものでござりまする。

秀吉 汝はおれを無學下賤ぢやといふの？

淀君 あなたは妻をば鼻先の強情ぢやと蔑みなされました。

秀吉 そちは自分から強情ぢやといふたぢやないか。

淀君 い、え、あなたが仰せられたのでござりまする。

秀吉 それに嘘はあるまい。

淀君 倭言葉を知らぬ人を無學だといふたにも、嘘はござりますまい。

秀吉 倭言葉は知らないでも天下は治まるわ。

淀君 でも大和人とは申されませぬ。

秀吉 おれは唐土の王になるのぢや、唐土の語には「こそ」でも「ぞ」でも、皆「り」で結ばせる。

淀君 捨丸（秀頼）の代になつたら、唐土でも倭言葉を用ひさせます。

秀吉 そりやならん。

淀君 何と仰せられても捨丸には妾の言を用ひさせます。

秀吉 それはおれが許さぬ。

淀君 許されえでも背きます。

秀吉 なに、おれの言に背く？

淀君 背きます。

秀吉 もう我慢がならぬ。（つと立上り、奥の方を見て高らかに呼はる。）山三、伴作、曾呂利は居ぬか。

（近習名古屋山三登場。）

山三 御召にござりまするか。

秀吉 奉行は誰が詰めて居る。

山三 石田殿居られまする。

秀吉 さらば治部に申しつけえ。西をば入牢申しつくる準備いたせと。

山三 (不安らしき面色) 西？ 西？ 御西さま、西丸さまの事でござりまするか。

秀吉 たわけめ！ 分らぬか、西丸の事ぢや。こゝに居る淀の事ぢや。

(山三呆れて淀君を見れど、存外落着いたものなり、秀吉ちらと見て。)

秀吉 それから治部に左様申せ、何時でも處刑しちぎの出來る様準備をいたし置けと。

山三 處刑、處刑と申しますると。

秀吉 斬首ぢや。

山三 (淀君を見る勇氣も失せ) は、あ。

秀吉 (立かゝる山三を呼止め) それから幽齋に逢ふて、謠の文句には、是非倭言葉の掟が入用か如何か、

尋ねてまるれ。

山三 ハ、ア。

(山三退場、日暮れて陰森の氣場に滿つ。)

淀君 謠にばかりではない、倭言葉は何にでも入用ぢや。

(淀君云ひ棄て、立上る。)

秀吉 何處へ行く。

淀君 死んだ後にも見苦しからぬ様、身のまはりをととのへねばなりません。捨丸にも一目逢ひたうござります。召仕のものもそれ／＼處置をつけねばなりません。

秀吉 それにしても左様急ぐ事は無いわ。

淀君 折角ではござりますが、片時でも惜うござります。書置も澤山か、ねばなりません。

秀吉 別れの盃をせう。

淀君 (口惜しげに) 時は少なうござります。爲べき事は多うござります。

秀吉 まあよいわ、一獻酌まう。

淀君 妾の御相手は御氣に召さぬ筈でござります。妾の生命は短かうござります。酒の他に考へねばならぬ事がたんとござります。

秀吉 (不安らしく笑ひながら) 淀、ありや嬉せとく戯ぢやよ。汝が左様真面目に取らうとは思ひもかけなんだよ。

淀君 妾にはその様な嬉せとく戯はわかりませぬ。

秀吉 まあ可いわく。過ぎた事は過ぎた事ぢや。兎に角一獻やらう。

(白銀の如き月光二人を照す)

秀吉 心地よい月ぢや、汝の琵琶を所望せうかの。

(山三入る。)

山三 石田どの俄かに腹痛退出致されました。尙幽齋どの仰せには、謠には倭言葉強ちに入用ではござりませぬとの事にござります。

秀吉

(勝利の色をつゝみかねて) よい、其方はもう退つてよい。治部明日登城致しても、何も申すには及ばぬぞ。(山三一禮して退場。) さあ、之から月見御殿へ行て琵琶を聴かうぞ。琵琶は汝に限る。

「山崎にこそ着きにけり、山崎にこそ着きにけり。」

淀君

「こそ」といへば「着きにけれ」でござりまする。

秀吉

(小兒を賺す如き甘たれたる調子にて) 左様ぢやく、そちの云ふ通りぢや。「着きにけれ」。さ、月見御殿へ行て一献酌まう。

(二人手を携へ奥へ入る。)

—幕—

大正十四年二月一日印刷  
 大正十五年八月一日再版  
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集  
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁  
 高安月  
 山崎紫  
 伊原青々  
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番  
 振替東京五二二九八番